の都市のニュアンスにひと役買っているのはいうまでもない。

いまやカナダでもっとも人口の多い都市となったトロントは、全般的にみて調和と多様性が象徴的に混在している都市である。全天候型街路のあるイートン・センターが、新しい都市の核として機能しながらも、これと隣接する各街区は、まさに多様な表情を共有している。そして都心部の近くに点在する人間くさい近隣コミュニティも、それぞれ独特の個性を有している。

そしてバンクーバーは、都市と大自然が、極めて人間的なスケールで共存している特徴と魅力を備えている。チャイナタウンの活気や、西部開拓の情緒ただようガスタウンの雰囲気が、さらにこの街に人なつこい彩りを与えているといってよいだろう。

いずれの都市についても、都市の生きざまは調和と多様性において個性的であり、その意味では世界に君臨する巨大都市でもなければ成熟した民族の都市でもない。しかし、そうした性格自体が、もしそれぞれの都市における妥協の産物であるとすれば、その中に積極的な創造的な意味を見出さない限り、カナダの都市のアイデンティティはあり得ないとする考え方が、現実的な説得力をもってくるように思われてならない。この考え方を、もし、創造的妥協（クリエーティブ・コンプロマイズ）といえるなら、である。そしてカナダの都市が「住みやすさ」を求めるがゆえに創造的妥協を思想とするなら、まさに、「住みやすさ」そのものを文化とするアイデンティティを見逃がすべきではない、と思う。

（北海道教育大学助教授＝デザイン学）

トロントのイートン・センター

モントリオールの古い街並み

注1 Perspective Canada による
注2 The Canadian Settlement Sampler
注3 Process No.5 に掲載

四季の花々と緑があふれている。

バンクーバーの都市開発は、土地の余裕がないために、最近まで空へ空へと伸びる傾向にあった。市内には近代高層建築がたち並び、また西部一の摩天楼を建てる州政府の計画もあったが、最近ではむしろ環境的にも機能的にも調和のとれた総合地区開発が目指されている。たとえば、アーサー・エリクソンが設計した市中心部のロブソン・スクエアは、市民センター（庭園、店、レストラン、保育所、スケートリンク等を含む）、裁判所、美術館からなる総合地区（コンプレックス）だ。

かつて移民労働者が多数流れこんだバンクーバーは、スラム改革が大きな課題である。

バンクーバーの発祥地ガスタウンは、赤レンガの道と建物で有名だったが、年代を経るにつれて老朽化し、一大スラムと化した。ガスタウンの復興は、地元実業家のイニシアチブにより、主に営利的見地から進められたが、古い建物や店の復元など、昔の街の面影を残す方向で行われた。いまではブティックやレストランで賑い、観光客の人気を集めている。

バンクーバー名物のチャイナタウンも再開発の対象となった。一九六〇年代にストラスコーナ地区の取り壊し計画が持ち上がったが、住民の反対により市では計画を全面撤回し、代わって「コミュニティ改善開発計画」を発足させた。州政府と連邦政府もこれを援助して、八つの近隣住区の〝オーバーホール〟が行われた。各区の再生プランは画一でなく住民の意思と地区の条件に応じて、古い建物の保存もあれば、取り壊し、新築もある。そして全区とも公園とオープン・スペースを取り入れて、住みやすい街づくりが目指された。

バンクーバーで最大の難物は、海岸や運河に面した地区である。薄汚れた倉庫や作業小屋、老朽家屋が並び、あるいは朽ちかけた桟橋、砂利だらけの空地が放置されていた。

そうした中で見事な再生を遂げたのがフォールス・クリーク地区である。浄化された運河には多数のヨットがつながれ、岸からなだらかな坂にかけて新築のコンドミニアム（分譲の低層マンション、テラスハウス）や改修された住宅、事務所が段々に並んで、新しい職住混合地区に変身した。

だが、ピアBC付近の中央海岸地区はまだ再開発の手がつけられておらず、今後の課題に残されている。

バンクーバー市では入江や水路に接した地区の再開発が課題。